

# 『病気を持っている子ども達の生活における問題点と解決策について』

八代清流高等学校 2年

## 1 テーマ設定の理由

興味のある分野として「子ども」「医療」であり、将来はそれらの分野に関わった仕事をしたいと考えており、「院内学級の保育士」という目標を持った。そこで「院内学級」について詳しく調べてみたいと思い、この探究テーマを設定した。

## 2 探究活動の概要 (abstraction)

院内学級について、子どもたちの精神面・社会性の育成に関する事、子どもたちの周りの環境問題に関する事の2点に焦点を当てて調査。まず幼少期の自分の入院時の様子を母にインタビューした。さらに社会性を身に付ける大切な時期における入院の影響について調査し、院内学級制度の抱える課題を整理し、自分なりに解決策を提案する。

## 3 調査内容 (探究活動の詳細)

ア) 両親からヒアリング (幼少期の入院時の様子)  
・子供が入院してから一番大変だったことは何か。  
→弟と一緒に入院していた時があり、二人の面倒を同時に見ないといけなかった。そこで祖母と協力して、一緒に面倒を見ていた。

・入院中の私の様子はどうだったか。

→ (私が2歳) 親がどちらかというとな下の弟につきっきりで世話をすることが多かったため、頻繁に泣いていたようだ。そのような私に両親は、弟のミルクの時間以外は私の方を見るようにしながら、祖母と交代で世話をしていたようだ。

イ) 保育園での体験学習について

・子どもたちは体力の限界がわからない

座っているよりも動き回る時間のほうが断然多く、一日中常に元気に走り回っているので私がついていくのが大変だった。

・うまくおしゃべりすることができない

子どもたちが私に何か話しかけていることや、何かをしてほしいということはわかるが、ただ単語を繋げただけの発言なので、意味を汲み取ることに苦労した。

ウ) 院内学級 (院内病棟) に関する調査

Webサイトで調べたことをまとめた。

○「院内学級」について

怪我や病気で入院しなければならない子どもたちのために、病院内に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級である。入院治療中は様々なことに対して選択や意思決定ができにくく、意欲低下や無気力感につながってしまう傾向にある。そのため、保育園や学校に戻った際に周囲とのコミュニケーションの取り方が難しくなりがちである。そこで社会性を身に付ける大事な時期に院内学級で過ごすことでより円滑に元の生活に戻れることを支援する施設である。

○院内学級の先生へのインタビュー記事から、私に気になったものを3つ紹介する。

(1)新しい子どもたちが院内学級に来たとき、一番最初にすることは「先に院内学級にいた子どもたちを傷つけること」である。例えば「この授業はもう習ったことある」「私のほうができている」など、このような言葉をかけることで、自分のほうが上なんだと主張する言動が見られる。

(2)入院児童生徒の学校を訪問した際「院内学級の子どもたちは頑張っている。だから健康で元気な君たちはもっと頑張らなくてはならない」と仰ってしまうことがある。しかしそうではなく、毎日不便なく学校に通うことができている児童生徒も、病気で院内学級に通わなければならない児童生徒も、みんなそれぞれの生きるところで頑張っているのだから、それを否定してはいけない。

(3)子どもたちはネガティブな感情を外にうまく表現することができない。だから、周囲の大人は悲しみの表現をしている子どもたちに対して、「本当は〇〇したかったんだよね」と、モヤモヤした感情を言葉にしてあげることで、子どもは「自分はだから悲しかったのか」と気づくことができる。

## 4. 課題点とその解決策について

病院内で療養生活を送る子どもたちの抱える課題を3点挙げ、その解決策を自分なりに考察した。

ア) 子どもの精神面の支えをどうするのか

一般的に、子どもたちは体力の限界まで動き回る。しかし、入院中の子どもは思うように動けず色々なことが制限されてしまい精神的に不安定になりがちである。その解決策として、人材や設備の必要な院内学級の増設より、端末を活用して在籍校のオンライン授業を受ける体制や環境づくりを推進することが必要であると考えた。

イ) 院内病棟にいた子どもの学校復帰への支援

院内病棟で長期間過ごした子どもが在籍校に通学ができるようになった際、慣れていない学校に途中から入るといことは、子どもたちにとってはとても苦しいことだ。だから、子供同士が早く仲良くなるには在籍校の先生との関係を事前に作っておくことが大切である。

ウ) 病院での環境問題について

同世代の子どもも含め、人と接する機会が少ないため、病院の外に出たときのコミュニケーションの取り方がうまくできないという課題がある。だから、できるだけ様々な人と接する機会を病院内で作っていくことが大切だと考える。

## 5. 参考文献

院内学級の先生へのインタビュー記事  
病気の子どものための教育の意義